

現場訪問

●視覚障がい者自動車運転体験

視覚障がい者の方々に、自分で運転する喜びを感じてもらおう

4月9日、10日の両日、アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ(以下、ASTP)で視覚障がい者自動車運転体験ツアーが開催された。このツアーは旅行会社のクラブツーリズム(株)(本社・東京都新宿区)が主催。同社バリアフリー旅行センター支店長の湖山知弘さんが企画した。湖山さんは「8年前、あるツアーに参加した視覚障がい者の方から『一生に一度でいいからクルマの運転をしてみたい』という夢を聞き、何とか実現させたいと思ったのです」と話す。

今回の体験ツアーには8名が同伴者とともに参加



しかし、受け入れてくれる会場がなかなか見つからなかったそうだ。そして5年が過ぎようとした時に、茨城県西自動車学校の協力が得られ、初のツアーは同校で2010年11月に実施された。当時のことを、茨城県西自動車学校代表取締役の塚田秀紀さんは「視覚障がい者の方の夢を実現する役に立てればと、協力

を申し出ました。心の底から『運転がしたい』と願っている方々に指導するのは、私たちに託してもらったことでした」と振り返る。指導に先立っては、校内で教習指導員と湖山さんがアイマスクをして、同乗者からの指示のみの運転を体験。どのような情報を伝えれば、視覚障がい者の方が安全かつスムーズに運転できるか、検討を重ねたという。ハンドルを回す時は、視覚障がい者の方が目ごろ、物の位置を確認する際に使う時計の針の位置で指示し、手を動かしてもらおうと正確に操作できることがわかった。ASTPでは、こうしたノウハウを受け継いでツアーを受け入れた。



インストラクターが正しい運転姿勢などについて説明した後、外周路を使って慣熟走行を行う



インストラクターの指示に合わせて、受講者がハンドルやアクセル、ブレーキを操作して、パイロンスラロームなどに取り組んだ

まず、広い外周コースを使い、トレーニング車両に慣れてもらうための慣熟走行を行う。ASTPのインストラクターが助手席に乗り、運転中は受講者にたえず速度やハンドルを

握る手の位置などの情報を伝達。例えば、左に曲がる時は「(左手を)9時、8時、6時」。それに慣れてくると、パイロンスラロームにチャレンジ。インストラクターの指示に合わせてハンドルを左右に切り、パイロンを通過していく。さらに、受講者は急制動なども体験した。受講者は「私たちに託って、クルマを運転することは夢のまた夢。それが現実になったから、とてもうれしい」と笑顔を浮かべる。「自分でアクセルを踏んで、走ることができて感動した」「広いコースだったのでスピードを出して、風を切っている感じを実感できたのが良かった」という声も聞かれた。ツアーを企画した湖山さんは「全国各地でこうしたツアーを開催したいので、私たちの活動に協力していただける教習所、施設があればありがたい」という。

●ツアーに関するお問合せ先: クラブツーリズム(株) バリアフリー旅行センター TEL 03-5323-6915

TOPICS 1 クミ化成(株) Honda関連企業のインストラクターが高等養護学校の生徒へ自転車教育を実施

クミ化成(株)(本社・東京都千代田区)は自動車内装部品の研究開発、製造、販売などを手がける企業である。同社名古屋工場(愛知県瀬戸市)では、ホンダ・パートナーシップインストラクター(以下、HPI)を養成。HPIが核となって社内や周辺地域の交通安全普及活動を行っている。4月9日には、HPI3名が愛知県立春日井高等養護学校で全校生徒162名を対象に交通安全教室を開催した。

クミ化成(株)名古屋工場副工場長の青山敦男さん(HPI)は、「高校生年代への交通安全教育は初めての取り組みです。企業の社会的責任として、周辺地域の方々に交通安全を啓発していくことは、たいへん重要だと位置づけています。そうした私たちの思いを高等養護学校の先生方に理解していただき、実現することができました」と、開催の背景を話す。春日井高等養護学校では生徒の約半数が通学に自転車を利用してのことから、ホンダ自転車シミュレーター(以下、シミュレーター)を活用し、生徒に危険予測能力を高めてもらうことをめざしたという。



生徒たちに質問を投げかけながら座学での説明を進めるクミ化成(株)名古屋工場副工場長の青山敦男さん

最初は座学。青山さんが体格に合わせた自転車の調整方法から、正しい運転姿勢とブレーキの使い方、自転車に関する法規を解説していく。また、学校周辺の見通しの悪い交差点の写真を見せながら、自転車の交通事故で最も多い事故類型は出会い頭衝突であることを説明。信号機のない交差点での出会い頭事故を防ぐために、交差点に入る前に止まって右・左・右、そして後ろを覗いてから発進するようにアドバイスした。続いて、シミュレーター体験。生徒の代表者3名がシミュレーターを体験し、他の生徒は大型スクリーンに映し出される体験者の運転状況の映像を確認する。HPIの高砂良一



生徒の代表者がシミュレーターを体験。他の生徒は大型スクリーンでその運転状況の映像を確認する



最後に生徒の代表者がHPIに感謝の言葉を述べた

さんと大幡浩志さんが、体験者が事故に遭ったり、ヒヤリハットした場面を再生し、安全に通行するためにどのようなことを予測すべきか生徒に問いかけながら、事故防止のポイントを伝えた。最後に、生徒の代表者が「今日は私たちのために、ありがとうございました。周囲の安全確認を十分に行う、危険を予測するなど、指導していただいたことを意識し、安全な学校生活を送っていきたいと思います」と、3名のHPIに感謝の言葉を述べ、交通安全教室は終了した。同校生徒指導主事である能田康雄教諭は「今回、クミ化成の協力を得たことで、これまでとは違う指導ができました。起こるかもしれない危険を予測するということが、生徒たちにとっての課題です。シミュレーターを活用することで、危険予測の必要性に気づいてもらうきっかけになったでしょう。また、ブレーキの正しい使い方など基本的なことも再確認できた点も良かったと思います」と話す。

TOPICS 2 ●第13回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会 74校134名の教習指導員が 安全運転指導の基礎となる運転技術を競い合う

全国33都道府県74校から134名の選手が参加



開会式で挨拶を行う峯川尚・本田技研工業(株)安全運転普及本部本部長

6月6日、7日の両日、鈴鹿サーキット交通教育センター(三重県鈴鹿市)で「第13回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会」(主催:本田技研工業(株)安全運転普及本部、後援:一般社団法人全日本指定自動車教習所協会連合会)が開催された。同大会は、全国の自動車教習所教習指導員の自己研鑽への動機づけや、他の教習所との交流の場を提供することを目的に2001年より毎年行われている。

開会式では、大会会長を務める峯川尚・本田技研工業(株)安全運転普及本部本部長が「ホンダは40年以上前から、安全運転教育や啓発活動に積極的に取り組んできました。この大会も、そうした取り組みの一つです。大会での経験が指導の現場で役に立つことを祈念しております。また、今回より全国14校15名の教習指導員の方々に審判員として参加していただき、ホンダと皆様とで大会をつくる新たなステップとなりました」と述べた。また来賓を代表して、加藤四郎・一般社団法人全日本指定自動車教習所協会連合会教習教育部長が挨拶を行った。



加藤四郎・一般社団法人全日本指定自動車教習所協会連合会教習教育部長

大型二輪部門「コーススラローム」

大型二輪部門「一本橋」



普通二輪部門「パインスラローム」

四輪部門「コーススラローム」



四輪部門「ブレーキング回避」



今大会は15名の教習所の指導員が各競技の審判員として協力した

普通二輪部門総合1位の新東京自動車教習所(東京都)・栗原慎吾さん、同2位の瀬戸自動車学校(愛知県)・今井雅彦さん、大型二輪部門総合1位の枚方自動車教習所(大阪府)・山部進也さん、同2位の中部日本自動車学校(愛知県)・小林潤さん、四輪部門総合1位のレインポーター・倉田誠さん、同2位のドリフト・モーター・スクール昭和(長野県)・桑原次夫さんには、全日本指定自動車教習所協会連合会会長賞が贈呈された。

NEWS REVIEW

●平成24年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式 様々な交通問題に関する研究成果を発表



4月12日、経団連会館(東京都千代田区)で、「平成24年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式」が開催された。

研究調査報告会は、平成24年度に成果が明らかになった研究プロジェクトの中から①「交通安全と交通取締りに関する研究」②「『天下の公道』と生活道路に関する研究」③「危険運転致死傷罪の学際的研究」④「知的障害者のモビリティ確保のための都市公共交通の課題」⑤「睡眠障害スクリーニングの普及推進を目指した学際的研究」の5テーマが発表された。

②では、久保田尚・埼玉大学大学院理工学研究科教授が、欧州の生活道路で広く普及しているライジング

ボラード*の日本での導入に向けた課題を整理。さらに埼玉大学の敷地内で運用実験を行い、公道への適用性などについても報告した。

34回目となる国際交通安全学会賞の表彰も合わせて行われ、業績部門では帯広市、十勝バス(株)、北海道拓殖バス(株)、大正交通(有)、毎日交通(株)、(株)エコERC、一般社団法人北海道開発技術センターによる「連携と認知〜十勝地域における公共交通活性化の取り組み〜」が受賞。論文部門では、「ドライバーが自分の運転を正しく認識する」ということが日本の運転教育に必要であることを示した中井宏・大阪大学大学院人間科学研究科助教と臼井伸之介・大阪大学大学院人間科学研究科教授による論文などが受賞した。



*ライジングボラード=道路に設置されたボール(ボラード)が機械式で昇降する装置。通行禁止規制の対象から除外された車両や通行許可を持った自動車だけがボラードを降下させて道路を通行できるようになっている。



写真左から、社会福祉法人別府リハビリテーションセンターの本田昇司センター長、二家本弘志常務理事、本田技研工業(株)安全運転普及本部の吉田宏樹事務局長、ホンダ太陽(株)の安藤善文取締役生産本部長

同研究体制を構築した。4月18日には、共同研究の調印式が別府リハビリテーションセンターで行われた。同センターの本田昇司センター長は「障がいがあっても、社会で生活していくためにクルマを運転しなければならなくなるケースがあります。そうした方々のために、当センターでは自動車運転練習施設を併設し、運転復帰の支援に取り組んでいます。しかし、患者様の運転能力の評価について私たちがだけでは難しい部分もありました。ホンダには自動車に関する技術や安全運転教育の蓄積があります。そうしたノウハウを私たちの持っている知見と組み合わせ、障がい者の方々が安心して運転できる環境づくりをめざしたいと考えています」と抱負を語る。今回は平成27年3月までの2年間、身体障がい者向け交通安全機器の検証とデータ蓄積、障がいの有無と運転操作の関係について共同で研究していく予定である。



3

●社会福祉法人別府リハビリテーションセンター 高齢者および障がい者等の 安全運転教育に関する共同研究

ホンダは、高齢者や障がい者等で移動を制約されている方々の社会参加・復帰に対し、より安全・安心・快適で自由な移動ができるよう、車両運転に関する各種研究を行い、安全に交通社会に参加してもらうことを目的に、社会福祉法人別府リハビリテーションセンター(大分県別府市)およびホンダ太陽(株)(大分県日出町)と共